

世間の「普通」じゃなくてもイイんだよ



自分らしく生きること

# マイペース マイスペース

～ひきこもりソーシャルワーク～

IN 金剛院



## 令和8年6月7日(日)

【第一部】 開場10:00/上映10:30

【第二部】 開場13:00 /上映13:30

トークショー 14:30~15:30

会場：金剛院 本堂（沼田市坊新田町1108）

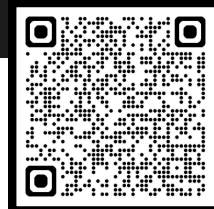
定員：各回30名

ひきこもりを経験した方を  
招いて

鑑賞  
無料

- ※募金のご協力をお願いいたします。（募金は社会福祉協議会等へ寄贈いたします）
- ※定員に達し次第、申し込みを締め切らせていただきます。
- ※金剛院の駐車場をご利用いただけます。

お申込みはこちらから→



〈令和8年度ひきこもり支援のための広域的居場所づくり事業〉

NPO法人ミニヨン・スター

沼田市高橋場町1895-5 TEL: 0278-25-8575

〈協力 まちの種〉

【あらすじ】

「人に迷惑をかけている気がしてしまう」「私は、どこにいても居場所がないような気がする」——『創 HAJIME-CAFE』で働く人は、かつて“ひきこもり”だった人たち。一步を踏み出し、社会と再びつながり始めた彼らは、日々不安や葛藤を抱えながらも、自分らしく働こうとしている。カフェで一緒に働く支援スタッフは彼らと向き合い、「普通」とは少し違う、“その人に合った働き方”を、共に試行錯誤しながら実践してきた。古民家を改装した、ぬくもりあふれるカフェ空間。ここには、張り詰めた心をそっとほどこいてくれる時間と、誰かとつながれる居場所がある。



## 自分らしく生きること 世間の「普通」じゃなくてもイイんだよ

監督・編集 古賀陽一 プロデューサー 中橋真紀人

【出演】創HAJIME-CAFEの皆さん、山本耕平（社会福祉法人 一麦会理事長）、岸本周平（前・和歌山県知事）

【協力】社会福祉法人 一麦会（麦の郷）、ハートフルハウス創、meglück（めぐりゅっく）、丸浅旅館（紀の川市）

【撮影協力】IL MENTO（イリアトルストゥ）、全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 関西（JYC関西2024実行委員会）

【撮影】小原信之 古賀陽一 【ナレーション】古賀陽一

【製作】有限会社 イメージ・サテライト 【共同製作】一般社団法人 障害者映像文化研究所

【かいせつ】

「不登校」の児童生徒が2023年度には過去最高の41万人超となり（文部科学省の調査）、その自殺者数も過去最高の527人（2024年）という深刻な数字となっている。それは若い世代をとりまく「生きづらさ」が強まっていることの反映であろう。そして、「ひきこもり」状態にある人は全国で推計146万人（内閣府の調査／2023年）、約50人に1人が「ひきこもり」となり、その期間も平均7～10年と長くなっているとの深刻な分析も出されている。学業の成績や成果が問われ、就職・結婚・子育てなどの“人生のステップ”においても、『普通』が当然とされる世間の眼は、少なくない人々の人生を“むずかしいもの”へと追い込んでいくのではないだろうか…。

自分を肯定できない不安を抱え、「自分探し」をしていたり、「自分の価値」を見いだせない焦っている人々が増えている。そんな時代に、築100年をこえる古民家カフェで働く人々の中にカメラが入り、各々が抱える想いを聞き出していく。自分らしく過ごせる「居場所」を見つけて、おだやかな日常生活を取り戻していく様子を描き出すドキュメンタリーである。



≪ 創カフェは希望の光 和歌山大学 教育学部長 山崎 由可里 (教授／教育学博士) ≫

いつの頃からか、日本社会は余裕・余力を失い、経済的に、精神的に追い詰められ生きづらさを抱える人が増えている。そんな社会を阿部彩氏（東京都立大学教授）は『弱者の居場所がない社会』として著した。

『My Pace My Space』は、過酷な日本社会に静かに抗うかのような古民家にあるハートフルハウス創を舞台にしたドキュメンタリーで、たとえ生きづらさを抱えたとしても、「何とかなる」という希望の光だ。ここは、いろんな悩みや生きづらさを抱える若者が、なかまと一緒におしゃべりやゲームを楽しみ、自分のペースで働き、各々の「居場所」となるところ。まさに、My Pace My Space。言いえて妙である。創には、「こうあるべき」という「像」は存在しない。なぜなら、創カフェにつどう若者たちは、世間が押し付けるスタンダード（「普通」）に追いつめられ傷つけられ、自信と「居場所」を失った経験をもっているから…。開設されて10年——映像からは、スタッフが試行錯誤しながら若者たちへの支援の在り方を考え、「当事者がどうしたいのかを勝手に思い込まず、まず本人に訊こう」というスタンスに至る様子も伝わってくる。そこからは「支援する・される」という一方向の関係性ではなく、いわば伴走型支援のあり様を見出すことができる。